

5-04 異学年生との合同授業における成果について

○姫田 由美(OT), 藤本 陽子(OT), 石川 進一(OT), 伊勢 将樹(OT)
社会福祉法人関西中央福祉会 平成リハビリテーション専門学校

Key word : 学習効果

【はじめに】作業療法養成校の入学生の学力偏差値は年々低下傾向にあり、学習経験が乏しい、学習方法が身につけていない、優先順位がつけられないなどの問題を抱えた学生が増加している。しかし最終学年では国家試験の合格を目指し、一定水準の学力に達していることが必要となる。近年の国家試験では長文や五者二択問題の増加に伴い知識だけでなく読解力や応用力も求められ、暗記だけでは対応できない傾向となっている。国立青少年教育振興機構調査(2016)によると高校生の特徴として「一夜漬けで勉強する」「宿題はするがそれ以外はしない」「受身的な授業が中心」と自主的な学習経験が低いと報告している。当校でも学習方法が分からず勉強に躓く学生が増加傾向にあるため、今回新たな取り組みとして学習に対し「責任」を課せ、学習方法や意識に変化が生じるか調査を行った。

【目的】役割や責任を持つことで学習方法や意識に変化が生じるかを明らかにし今後の在り方を検討する。

【対象】作業療法学科3年生13名、作業療法学科1年生31名とした。

【方法】3年生を6班に分け、各班に解剖学・生理学を中心とした課題を提示する。各班に1年生がその内容を理解できるようレクチャー内容を考える。説明時間は1回につき10分とし5分の質疑応答時間も設けた。同様の方法で3回実施した後、アンケート調査を行った。

【倫理的配慮】アンケート調査において、参加者には口頭にて説明し同意を得たうえで回答を得た。

【結果】回収したアンケートの中から

- ①自身の取り組み姿勢について
- ②3年生の教え方について(1年生のみ)
- ③3回のレクチャーを通し改善した点・工夫した点(3年生のみ)

に注目した。①では3年生の91%、1年生の77%が3回のレクチャーを通して自身の取り組み姿勢に変化があったと回答した。②では87%の学生が良い・大変

良いと回答した。③では「分かりやすい説明を心がけた」「模型を作って説明した」「質問をしながら相手の理解度を確認しながら説明を行った」など、3回の取り組みの中で、調べたことを「読み上げる」レクチャーから「説明する」「理解を促す」レクチャーとなり、暗記型の勉強方法では対応できない関わり方へと変化した。

【考察】今回、学習経験の乏しさや受身的授業が中心だったことに起因する暗記型勉強方法を問題視し、役割や責任を持つことが学習方法や意識に変化をもたらすのではないかと考えた。3年生に「1年生に勉強を教える」課題を課し、勉強会を行ったところ、3年生・1年生ともに多くの学生が取り組み姿勢に変化をもたらすことができた。ラーニングピラミッドでは「講義」の受講における学習定着率は5%であるのに対し、「他の人に教える」ことでの学習定着率は90%と示されている。また、Johnsonらは5つの基本的構成要素(相互協力関係、対面的-積極的相互作用、個人の責任、小集団での対人技能、グループの改善手続)を取り入れることで協調学習を効果的にさせると述べている。今回の取り組みは「他の人に教える」能動的学習の集大成ともいえ、さらに「責任を持って教える」役割を担うことで、より効果的な学習方法になったと考える。また、長谷川は異学年での学びは自己肯定感の向上や学習効果にもつながるとしており、文部科学省の調査においても自己肯定感の高い方が挑戦心や勉強に関する意識が高いと報告されている。さらに自己肯定感とは他者との協働の中で自分の役割を果たすことで高めることができるとしており、今回の取り組みは有効だったと考える。今後も上級生としての役割を意識的・意図的に用いることで、どのような変化をもたらすのか継続して調査していく必要があると考える。